

| | |
|--|---|
| AGLOS Special Issue: Workshop and Symposium 2013–2014: 1–21 ISSN 1884-8052 | Copyright ©2015 Graduate School of Global Studies, Sophia University http://gds-gs-sophia.jp |
|--|---|

Intersection of the Local and Global: Meaning Construction Process in Iwaishima Island Anti-nuclear Movement.

Yousuke Tatsuno

Abstract : Recently, anti-nuclear movement is being noticed as one form of transnational social movement. The purpose of this article is to analyze how social movement groups construct the meanings of transnational and local, and in doing so clarify the interaction between those two levels.

Social movement processes include the “meaning construction process”. This is defined as being the manner in which participants of the movement understand and interpret their own actions and also the target of their activities. This article highlights the meaning construction processes of the anti-nuclear movement in Iwaishima Island. In order to do so, we investigate data of the history of aforementioned movement, as well as the inter-play among the participants of the social movement process. In addition, we look into the daily-life of Iwaishima islanders and the experience of participants.

Then, we clarify the meaning attribution process of the two levels, and delineate the conditions under which the transnational meanings become accepted by the local social movement.

Keywords : Social movement theory, Cultural approach of Social movement, Meaning theory, Collective identity theory, Transnational social movement.

トランスナショナルな「意味」がローカルな「意味」に交わるところ —山口県上関町祝島での反原発運動を事例として—

龍野 洋介

要旨：本稿の目的は、「3.11」以降、トランスナショナルな社会運動の一つとして展開される、反原発運動を事例として、社会運動の「意味」構築プロセスを明らかにしつつ、トランスナショナルな「意味」とローカルな「意味」の関係を探求することである。

社会運動過程には、「意味」構築プロセスが存在する。これは、運動参加者が運動行為や運動の対象に関する解釈・理解の仕方を作り上げていくプロセスを指す。本稿では、この「意味」構築プロセスに着目し、その源泉となりうる運動過程の歴史、様々な相互作用、ならびに運動参加者の経験や日常生活などの文化的要素を手がかりに議論を展開した。

検討の結果、本稿は運動参加者が「意味」をいかにして獲得するのか、ならびにトランスナショナルな「意味」とローカルな「意味」の関係を明らかにすることで、トランスナショナルな「意味」がローカル運動に受容される条件を描き出すことに成功した。

キーワード：社会運動論、社会運動の文化論アプローチ、集合的アイデンティティ論、意味論、トランスナショナル社会運動

1. はじめに

2011年の「3.11」以降、日本のみならず複数の国家で反原発運動が展開されている。例えば、韓国、台湾、中国などの東アジア諸国にて継続的に反原発を掲げた社会運動が展開されている。こうした状況は東アジアに限定されない。ドイツ、アメリカ等の欧米諸国でも同様に2011年以降、運動が活性化している。このように現代の反原発運動は、トランスナショナル社会運動として様々な国や地域で展開されている。

トランスナショナル社会運動として反原発運動を詳細に観察してみれば、一つの興味深い事実が浮かび上がる。それは、複数の地域で観察された「意味」¹⁾と特定の地域で観察された「意味」の存在、すなわち、トランスナショナルな「意味」とローカルな「意味」である。トランスナショナルな「意味」とは、複数国の反原発運動にて共通して見られた人々の運動・抗議対象に対する解釈や理解の仕方である。例えば、日本とインドの反原発運動では津波と原発災害の映像をもとに、「恐怖をもたらすもの」という「意味」を原発に付与している。あるいは、それぞれの運動で観察された「ノーモア・ヒロシマ」、「ノーモ

¹⁾ 本稿では、Nomiya and Sugino(2013)を参考に「意味」概念を人々が参加する運動や対象の解釈・理解の仕方として設定する。

ア・フクシマ」²⁾という「意味」は、原爆や放射能事故のインパクトが国家を越えて共有されていることが考えられる。こうした「ヒロシマ」などの「意味」はまた、インドや日本のみならず、様々な国の反原発運動で観察されている。他方で、ローカルな「意味」とは、それぞれの地域に限定的に見られた人々の運動・抗議対象に対する解釈や理解の仕方を指す。例えば、日本の反原発運動では、地域に根差したお祭りなどの「伝統行事を破壊するもの」という「意味」を原発に付与していたことが観察された。つまり、近年のトランスナショナル化した反原発運動にはトランスナショナルな「意味」とローカルな「意味」が多層的に存在していることが推測される。しかしながら、既存の社会運動論において、一つの社会運動に内在する「意味」の多層性を検討した議論は少ない。

また、先行研究の多くは一部を除き³⁾トランスナショナル運動とローカル運動を分断して描いてきた。すなわち、トランスナショナルからローカルへ、あるいは、ローカルからトランスナショナルに変化する現象として、社会運動を検討した議論は多くはない。つまり、トランスナショナルな「意味」とローカルな「意味」、あるいは、両運動間の相互作用に焦点を当てた研究はなされてこなかったといえよう。

以上のことから本稿では、二つの問いを設定して議論を進める。第一に、社会運動過程においてトランスナショナルな「意味」とローカルな「意味」はどのように獲得されるのか。第二に、トランスナショナルな「意味」とローカルな「意味」はどのような関係にあるのかである。これらの問いを検討することで、社会運動の「意味」構築プロセスを明らかにするとともに、トランスナショナル社会運動とローカル社会運動の関係を描き出すことを課題とする。

以下、社会運動論領域の先行研究を確認したうえで、本稿の分析デザインを確認する(第2節)。次に対象とする事例である山口県上関町で展開されている上関原発反対運動を概観していくとともに、分析に必要な要素を抽出する(第3節)。そして、分析視角をもとに上関原発反原発運動を紐解いていく(第4節)。最後に第4節で得られた知見をもとに、本稿での結論を提示する(第5節)。

2. 先行研究と分析デザインの提示

2.1 先行研究の検討

これまでのトランスナショナル社会運動を扱った研究では、主に運動を取り巻く環境を

²⁾ 例えば、「あらゆる方面から沸き起こる「日印原子力協定にノー」の声」. 2014. 『DiaNuke.org DIALOGUES and RESOURCES on Nuclear, Nature and Society Liability』. (2014年10月3日取得. <http://goo.gl/iv2r7z/>)または、“Fukushima-Chernobyl commemoration programmes begin in Kolkata No more Fukushima, Not in Koodankulam, Nor Anywhere Else Press release and Text of Letter to Prime Minister of India ”, 2012, *South Asia Citizens Web*. (2014年10月3日取得. <http://www.sacw.net/article2580.html>)などを参照されたい。

³⁾ 例えば、Rothman and Oliver(2002)、Tarrow(2005)などが挙げられる。

論じてきた。例えば Adamson(2005)は、グローバリゼーションに伴い生じたアイデアや資本、そして人の移動がトランスナショナルな政治的運動の生起と動機づけに寄与したと論じる。Smith(2004)は、グローバル化とともに複数国で問題化した環境や気候変動などのグローバルイシューの増加と多様な国家で形成された政治的機会構造⁴⁾に着目することの重要性を示唆する。Tarrow(2005)はナショナルレベルとグローバルレベルでのイシューやアイデア、トランスナショナルな闘争(contention)を運動の環境的メカニズム、関係的メカニズム、そして認知的メカニズムの三つの局面から検討している。このように、従来のトランスナショナル社会運動研究の多くは「グローバルな活動を維持する上での構造要因に焦点」(Nomiya 2009, 118)を当ててきたといえる。しかしながら、グローバルなレベルでの構造要因のみからの検討では、トランスナショナル運動の詳細なプロセスを解明することは困難であろう。例えば、ローカル運動のトランスナショナル化を解明するには、従来のようにグローバルな構造要因にのみ着目するのではなく、一国内に収まっていたローカルな運動が、トランスナショナルなレベルで活動するに至るまでに生じたインパクトや変化のプロセスを検討することが必要である。

トランスナショナル社会運動を扱った研究ではまた、運動間の心理的要素の交流に焦点を当て議論されてきた。例えば、Bayard de Volo(2000)は、抗議活動がナショナルレベルからグローバルレベルへとシフトするには、抗議対象に関するグローバルなマスターフレーム(問題解釈枠組み)の構築が求められると論じる。Tarrow(2005)もまた、ローカルな運動がグローバルマスターフレームを内面化(internalization)するプロセスに着目する必要性を提示する(Tarrow 2005: 32-34)。このように先行研究では、ローカルフレームとグローバルマスターフレームの接続を経て、ローカル運動がグローバル運動として一つの運動に収斂していく点が論じられてきた(Edwards 2014)。しかしながら、この観点では例えば、ローカルなフレームとグローバルなマスターフレームがどのように構築されたのか、あるいは、何故それぞれのフレームが共鳴(resonance)したのか、などの点が不明瞭なままである。さらにフレーミング分析には、運動成功の結果からフレーム共鳴を説明するアドホック、ポストホックな問題が残る⁵⁾。つまり、トランスナショナル社会運動の理解を深めるためには、(1)当該運動の詳細なトランスナショナル化プロセスを検討しつつ、フレーム分析とは異なる観点から(2)運動に参加者の問題解釈枠組みを解明するアプローチに依拠する必要がある。

こうした議論を踏まえ、本稿では、運動に参加する人々や組織がどのような要素を「意味」の源泉とし、且ついかなる「意味」を構築し運動や対象に付与したのか、を捉えるための分析デザインを設定する。これまでの社会運動論領域において、こうした点に着目し

⁴⁾ 例えば、Giugni et al., (2006)が提示した超国家的政治的機会構造(Supranational Political Opportunity Structure)などの研究が挙げられる。

⁵⁾ 例えば、野宮(2002, 193-205)に当該問題が詳細に述べられている。

た議論は第1に文化論アプローチ、第2に意味論アプローチ、第3に集合的アイデンティティ論アプローチが挙げられる。以下、それぞれのアプローチを概観したうえ、本稿での分析デザインを構成し提示する。

第1に挙げた文化論アプローチ⁶⁾から議論した西城戸(2008)は、抗議活動の起点としての運動文化、すなわち、「抗議活動が生起する認知的、文化的起点」(西城戸 2008, 55)に着目する必要があると論じる。西城戸によれば、運動文化とは「(1)集合的記憶、(2)組織内サブカルチャー(組織内の仕組み)、(3)集合的アイデンティティ」(西城戸 2008, 59-60)から構成されている。そして、抗議活動の認知的・文化的な起点となる「文化的要因がどのようなものであり、またその要因を醸成・維持するような構造がどのようなものか」(西城戸 2008, 55)を考察することの重要性を提示する。

こうした運動の認知的・文化的起点に着目した議論として例えば、松田(1997)やMelucci(1989=1997)の研究がある。松田はアフリカでの暴動が「平時の集団の規範や行動パターンとはまったく異なった、衝動的で非合理的な行動として捉えられてきた」(松田 1997, 101)ことに対し、「平穏な日常とも連続する社会生活の一部」(松田 1997, 102)であることを論じている。Melucci(1989=1997)は「運動は、日常的な社会的関係のネットワークのなかに、時間や空間を再獲得する意思のなかに、あるいはオールタナティブなライフスタイルを実践する試みのなかに、息づいている」(Melucci 1989=1997, 78)ことを提示する。すなわち、表面には浮き出てこない隠れたネットワーク(submerged networks)に、人々の認識を形成する要因が存在し、そこに着目する必要があることを提示している。

また、文化的要素は運動の起点としてのみ作用するものではないことも議論されている。例えば、Johnston(2014)は、運動過程に存在する歌や絵などの文化的要素が人々の解釈や動機を考察する上で重要であると論じる。このように、社会運動の文化論アプローチからは社会運動過程における文化的要素、ならびに運動をめぐる空間的要素に着目し検討することが肝要であることがわかる。

第2に、社会運動の意味論アプローチ(野宮 2002; Nomiya 2009; Nomiya and Sugino 2013)によれば、「意味」を「解釈や理解のセット」(Nomiya and Sugino 2013, 11)と捉え、「抵抗に含まれる意味の源泉、意味形成のプロセス」(野宮 2002, 208)を研究対象とする。野宮(2002)によれば、意味形成プロセスを観察する上で重要なことは、抵抗の源泉にあると考えられる人々の「生活」や「日常」などの要素を詳細に観察し、運動の現場で人々や組織が提起する「意味」とそれらの連鎖を検討していく作業である。すなわち、「何と何が意味連鎖をおこし新しい意味の形成がなされていったか」(野宮 2002, 209)を観察・記述しつつ、「形成された意味に正当性が付与される過程」(野宮 2002, 209)を分析していく作業が必要とな

⁶⁾ 例えば、先行研究では文化的要素としてフレーム、集合的アイデンティティ、記憶、感情、規範などが挙げられている(Johnston and Klandermans 1995; Snow et al. 1986; Snow and Benford 1988,1992; Fantasia 1988; Poletta and Jasper 2001; Melucci 1989=1997,1995,1996)。

る。こうした作業の結果として、「何が脅威にさらされているのか、何が争われているのか、そして抵抗はどこから紡ぎだされているのか」(野宮 2002, 208)を捉えることができると野宮は論じている。このように社会運動の意味論アプローチでは、社会運動に参加した人々と組織の提起する「意味」とその意味源泉を記述・分析することが重要であることがわかる。

第3の集合的アイデンティティ論アプローチでは、運動に関わる人々が構築した意味、あるいは動機や不満などの心理的要素が社会運動に共有されていくプロセスに着目し議論する。Melucci(1989=1997,1996)によれば、集合的アイデンティティとは行為の目的方向性や制限・機会の領域に関する諸個人や集団の認識に基づいた定義のプロセスであり、相互作用や交渉などを通じて決定などの判断がなされる能動的な関係(Active Relationship)から構成されると論じられる(Melucci 1996, 70-71)。こうした理解に基づき、Melucciは集合的アイデンティティという概念を「行為者が共通の認知フレームワークを生み出すプロセス」(Melucci 1989=1997: 30)として定義する。すなわち、Melucciの議論を援用すれば、社会運動とは人々と組織が運動過程での様々な相互作用を経て、共通の認知的枠組みを構築するプロセスそのものと考えられるであろう⁷⁾。

Taylor and Whittier (1992)は、集合的アイデンティティの構築過程を捉えるには三つの分析的概念、すなわち(1)境界(boundaries)、(2)意識(consciousness)、(3)交渉(negotiation)に着目することが重要であると論じる。(1)境界概念は、心理的要素と物理的要素から構成され、社会運動の担い手である挑戦者と運動外の支配的集団との間の区分に注目する。(2)意識概念では、挑戦者らの利益に関する認識と定義を明示化する解釈的なフレームワークに注目する。例えば、彼女らの事例分析によれば、レズビアンフェミニスト達は運動を通じて、「フェミニズムとしてのレズビアニズム」(Taylor and Whittier 1992, 117)を再認識したことを示している。(3)交渉概念では、既存の支配的制度への抵抗、あるいはそれを再構築していく過程に注目する。例えば、レズビアンフェミニスト運動では、日常の政治問題化から非階層的な意思決定を行うレズビアンフェミニスト組織の構築に至るまで、参加者それぞれの多様な帰属意識(identity)にもとづく交渉を行ったと説明する。つまり、集合的アイデンティティを捉えるには運動過程において、運動とそれを取りまく行為主体、運動の提起する問題認識、そして運動が行なう内側と外側の交渉をつぶさに検討することが重要であることがわかる。このように、集合的アイデンティティ論アプローチからは、運動過程での人々の相互作用、その結果の共通の認識枠組みや心理的要素に着目する必要性を示唆する。

2.2 分析デザイン

以上の議論を踏まえ、分析デザインを提示する。本稿では、社会運動のトランスナショ

⁷⁾ 伊藤の研究によれば、Melucciは社会運動を「相互作用と交渉を通じて集合行為者の間に意味が産出され、集合的アイデンティティが構築されていくプロセス」(伊藤 2011: 180)とみなしている」と論じている。

ナルな「意味」とローカルな「意味」はどのように獲得されるのか、そして、トランスナショナルな「意味」とローカルな「意味」はどのような関係にあるのかを問う。この問いに対して、本稿では社会運動過程における文化的要素、運動をめぐる空間的要素を意味源泉と設定し、この源泉をもとに運動参加者が運動や抗議対象の「意味」を構築していく過程を記述・分析する。あわせて、運動の歴史と人々の相互作用に着目することで、こうした「意味」をもとに運動共通の認識枠組みを構成していくプロセスを描き出す。

本稿では Spybey(1996)、Langman(2005)、McDonald(2006)、Nomiya(2009, 2014)を参考に、トランスナショナル社会運動の定義をグローバルな 이슈を問題と認識した人々や組織が参加し、且つその問題認識を共有することによって複数国間で連鎖的に生じた社会運動と設定する。例えば Nomiya(2014)では人々のグローバルな問題認識の増加が、多様な運動組織間での問題理解の共有、協調的行動、そして集合的な意識を構成するという。こうした問題認識はさらに個人にも広まっていき、結果として問題認識の共有や協調的行動を促進させていくことが示唆されている。

このような定義のもと、本稿ではトランスナショナル運動として反原発運動を論じる。とりわけ「3.11」以降の反原発運動は、本論の焦点であるトランスナショナルな「意味」とローカルな「意味」の連鎖を考察する上で最適な事例と考える。「3.11」以降の、日本の反原発運動は地球規模で連鎖的に展開されてきた「大きな波」(Nomiya 2014, 86)の一部として理解される。同時に、この運動はそれ以前から日本国内の各地でローカルな「意味」を付与されながら連綿として続けられてきた運動でもある(Tatsuno 2014)。すなわち、「3.11」以降の日本の反原発運動は、トランスナショナルな局面とローカルな局面とが交差する空間として理解することができるだろう。本稿では、山口県上関町にて1982年から今なお展開されている上関原発反対運動を事例として選択する。用いるデータは、上関原発反対運動の現地調査、及び過去事例の資料調査から得られたものである。

3. 上関原発反対運動の歴史と現状

本稿が事例とする上関原発反対運動は山口県室津半島の南端に位置する室津、祝島、長島、そして八島などで構成される上関町にて展開されている。この上関町では日本の地域都市に見られる過疎・高齢化、第一次産業への依存などの課題を抱えており、80年代以降、その解決策が模索されてきた。こうした背景のもと、1982年6月に当時の上関町長が原発誘致の意向を表明する。この原発誘致表明に対し、82年の11月、祝島島民の約9割から構成される原発反対組織「愛郷一心会」が結成される。以降、現在に至るまで上関原発反対運動はこの「愛郷一心会」と後継団体である「上関原発を建てさせない祝島島民の会」を中心として活動が展開されている。

この原発誘致表明は、上関町内の人々を賛成派と反対派に分断する結果を生み出した。この分断をより掘り下げてみれば、上関町内での推進・反対、あるいは祝島などの周辺の

島々でも賛否をめぐり対立が生じるようになっていた。例えば、「推進派が『反対派のいやがらせによって人権や生活がおびやかされている』と訴えたのに対し、反対派が『問題の根源は原発にある。推進派こそ我々にいやがらせしている』」(朝日新聞山口支局 2001, 38) というように、住民間でのトラブルが多発するようになった。つまり、原発誘致計画以降、上関町一帯にて住民同士の分断が進んでいくことになった。

このように賛成派と反対派の対立が続くなか、反対運動組織「愛郷一心会」は92年に「上関原発を建てさせない祝島島民の会」へと会を改める。この変更には二つの理由があった。第1に、会長や事務局長らによる組織運営方式を合議制に変更し会員の意思統一を進めること、第2に、従来の反原発のみを目的にしてきた活動内容を多様化し、祝島の伝統行事である「神舞」の復興などに拡げ、活動の活性化を図ることである。他方、推進派である中国電力が上関原発建設計画を94年度施設計画に組み込む方針を山口県に打診する。これは国から「要対策重要電源指定地域」として立地交付金の指定地域に選定されることを意味している。これを受け、山口県は「中電と地元の意向を尊重する」(朝日新聞山口支局 2001, 92) という回答を示している。

さて、中国電力は1999年に環境影響調査書を提示する。このことは、一つの問題を表面化させる。すなわち、予定地域周辺での希少生物である「スナメリ、ハヤブサ、ナメクジウオ、ヤシマイシン近似種」(だめ!上関原発 2011, 13)の存在の認知である。この結果、1999年9月に、上関原子力発電所建設計画の環境アセスメントの不備を追及し、予定地である山口県上関町長島の貴重な自然環境と生態系を保全すること、そしてこうした希少種の調査を目的に、「長島の自然を守る会」⁸⁾が結成されることにつながった。この組織の特徴は、日本生態学会や日本鳥学会など各分野の専門家と原発建設予定地域周辺を調査すること、そしてその結果を国際シンポジウムや学会などで報告することである。つまり、自然保護をめぐる専門家集団が上関原発反対運動に参加したといえる。

こうした動きと並行して、祝島島民を中心とした「上関原発を建てさせない祝島島民の会」もまた継続して活動を続けていた。2004年には同団体に「原発に反対する上関町民の会」などを加えた4団体が、上関港の広場で抗議集会を開催した。この集会では、従来の反原発一辺倒から原発に頼らない町づくりの具体案への転換という方針が示されている。例えば、「原発に反対する町民の会」の会報によれば、2003年から自然や歴史を生かした町づくり案が掲載されている。あるいは、町の祭りや特産品に関する情報を紹介することで、原発立地による交付金目的の在り方に疑問を示している。つまり、反対派による活動に変化が見られた時期として考えることができるだろう。

2009年、中国電力は原発用地の造成に着手することとなる。対して、「上関原発を建てさせない祝島島民の会」、「原水爆禁止山口県民会議」、「原発に反対する上関町民の会」、「原

⁸⁾ 現在は「上関の自然を守る会」に名前を変更している。

発いらん!山口ネットワーク」などの5団体が原発建設計画反対の署名活動を展開する。この書面には5つの反対理由が提示されている。第1に、上関町内の推進・反対に二分された人間関係、第2に、地元住民の意向を考慮しない国や中国電力への不満、第3に柏崎刈羽原発事故・石川志賀原発での臨界事故などから判明した事業者の体質や事故への恐怖、第4に埋め立てによる生態系の破壊といった自然への被害、そして第5に埋め立てによる漁業への被害である。

2010年10月、愛知県名古屋市にて生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)が開催される。この国際会議において、上関原発計画に反対する団体が精力的に活動を展開する。例えば、「広島・上関リンク」という団体は、国内外200以上の環境NGOとの共同声明として、上関原発建設計画を会議における重要協議事項として取り上げる声明を提起した。また、同団体は海外メディアや国際NGO、そして政府代表団などを対象に海外新聞などの媒体に反対意見広告を掲載する活動を展開している。また、「上関の自然を守る会」、「日本鳥学会」、そして「グリーンアクション」などの団体が上関に関する緊急記者会見を行い、世界14カ国304団体が上関計画中止に賛同するという結果を出している。しかしながら、2011年2月、中国電力はこうした行動を意に介さず、建設工事を再開する。この中国電力の工事再開に際した抗議活動では中国電力側と反対派がもみ合いとなり、反対派が病院に搬送されている。このように、反対派・推進派の対立がより深まった時期であった。

中国電力と反対派の間での緊張が高まる中、「3.11」が発生する。この災害は、上関町政などの推進派に少なからず影響があったと考えられる。例えば2011年11月以降、上関町政は「地域ビジョン検討会」という会合を開催した。これは「3.11」以降、国の原発政策の方向性が定まらないことで原発関連交付金の確保が不透明になったことを受け、上関町長を中心に立ち上げられた会合である。この会合について町長は「町民のために膝詰めで協議をする場にしたい」と述べ、また「上関原発を建てさせない祝島島民の会」代表であり、会合参加者のS氏は「互いに真剣に議論するよい機会」⁹⁾と述べている。このように、「3.11」以降、上関町は原発に依存しない町づくりの在り方を模索し始めていた。

このような変化があった一方で、運動は継続して展開されていた。その理由として、S氏は「去年(2011年)の7月いっぱいまで計画が無くなると思った」と語りつつ、「地域ビジョン検討会」に参加する推進派が自然エネルギーの導入に対して不信感を示していることを挙げている。さらに、S氏は「推進派がまだまだ頑丈な原発を作ってもらいたい」と言い、今度の選挙で自民党になったら推進するかもしれない(2012.10.04. S氏インタビュー)と語る。つまり、反対派の人々は原発計画の撤回を示さない上関町政に対して、不信あるいは不満のような感情を抱いていることが推測される。こうした感覚は、他のメンバーの言葉にも表れている。例えば、「上関原発を建てさせない祝島島民の会」のメンバーは町政について、

⁹⁾「視点2012 山口県上関町『地域ビジョン検討会』」. 2012. 『中国新聞ヒロシマ平和メディアセンター』(2014年10月8日取得. <http://www.hiroshimapeacemedia.jp/?p=18339>).

「(東日本大震災以降の)時の流れで決議せざるを得なかったという側面もあり、『再開をもにらんだ凍結』では安心できない」(石塚 2011, 63)と述べている。このように、反対派の人々は原発計画推進が再び活発化することを危惧し、運動を継続していることが考えられる。

以上、上関原発反対運動は「上関原発を建てさせない祝島島民の会」及び祝島島民、そして「上関の自然を守る会」などの組織を中心に、運動が生起したところから現在に至るまでに、いくつかの相互作用を経験し、変化してきたことがわかった。まず、92年に「愛郷一心会」から「上関原発を建てさせない祝島島民の会」への変化が見られた。この背景には反原発のみに言及するのではなく、祝島の伝統行事である「神舞」の復興などに目的を拡げ、活動の活性化を図るという狙いがあった。さらに2003年には、上関町の今後の在り方を提案していたように、上関町に対する祝島島民の関わり方にも変化が生じていた。

次に、「上関の自然を守る会」の結成と運動参加による変化がみられた。当該団体は結成以降、様々な調査活動、国内外の各種シンポジウムへの参加、そして国際会議への参加などを通じて上関原発建設計画の状況を周知するとともに、そこで得られた知識を運動の現場へと導入していた。すなわち、反対運動に参加していた島民らが原発に新たな「意味」を付与するきっかけをもたらす存在であったと考えられる。

こうした様々な変化は、2009年の上関原発反対運動が提起した以下の五点に結集されていると考えられるだろう。すなわち、(1)住民関係や漁業への被害(日常生活)、(2)地元住民の意向を考慮しない国や中国電力への不満(政治)、(3)過去の事故から見る汚染(事故の恐怖)そして(4)生態系の破壊(自然破壊)である。加えて、原発反対運動の過程で(5)町の新しい在り方の模索(町おこし)も運動目的として提起されている。

以上をもとに、人々が原発反対運動にて提起した問題認識をまとめると以下のとおりとなる。第1に、運動発足当初から現代まで継続的に観察された(1)住民関係や漁業への被害と(2)地元住民の意向を考慮しない国や中国電力への不満、そして(3)過去の事故から見る汚染である。これらは、祝島島民の「日常生活」、「経験」そして「記憶」などが源泉にあることが考えられる。第2に、2000年代以降、観察された問題認識があった。すなわち、(4)生態系の破壊と(5)町の新しい在り方の模索である。これらのうち、前者は「上関の自然を守る会」によって導入されたものであろう。たしかに2000年代以前にも「自然」保護と原発計画を連鎖させた問題提起が見られた。だが、「生態系の破壊」をめぐる提起はそこには見られない。つまり、「生態系の破壊」という問題の存在を「上関の自然を守る会」が伝播したことが要因であると推測される。また、こうした提起により、祝島島民の原発に対する「意味」が変化した結果が後者であることも考えられる。後述するが祝島島民は生態系の破壊と自然を連鎖させ、新たな規則をつくりだし、運動に新たな意味を見出していた。

つまり、第1の問題認識は祝島島民が「祝島」という空間に在る文化的要素をもとに構築したものであろう。本稿ではこれらをローカルな問題認識として考える。第2の問題認識は、祝島以外の組織が上関原発反対運動に持ち込んだ情報をもとに構築したものである

とともに、祝島内外の人々が相互作用した結果として構築されたものであろう。本稿では、これらをトランスナショナルな問題認識として考える。以下では、これらの認識を手がかりに、ローカルな「意味」とトランスナショナルな「意味」がいかにして構築されたのかを考察するとともに、それぞれの「意味」の関係を解き明かしていく。

4. 考察

4.1 祝島の日常から見るローカルな「意味」

まず、(1)住民関係や漁業への被害、(2)地元住民の意向を考慮しない国や中国電力への不満という問題認識から原発や運動に付与された「意味」を考察していく。上関原発計画によってもたらされた脅威は第1に、原発計画以降の上関町内での住民問題、第2に、漁業などの第一次産業に対する被害といえる。第1の住民問題に関して、例えば「推進派のほとんどは、本土にいる息子などを頼って、いつでも島を捨てられる人。だけど私らには、この島以外に行き場がない」(朝日新聞山口支局 2001, 49)、あるいは「中立の立場だったのに。ここまで感情がこじれたら、昔の人情あつい島にもどるのは、もはや難しいのでは」(朝日新聞山口支局 2001, 49)などが島民により語られている。また祝島、上関町では「隣近所含めて農業者同士、漁業者同士の間で助け合い、昔から共同活動」(2012.10.04. S氏インタビュー)がなされていたとも語っている。

このような人間関係や共同活動の破壊による結果を考える上で、例えば「神舞」という伝統行事を見てみたい。神舞とは県指定無形民俗文化財であり、大分県国見町伊美の別宮社の神職らが船で祝島に渡り、神楽を奉納するという行事である。この行事について、S氏は非常に重要な行事と語りつつ「祝島には神舞があるから、ここに住む。お盆と一緒に会社を休んだりして帰ってくる人もいる」(2012.10.04. S氏インタビュー)と述べる。つまり、祝島で暮らす人々にとって非常に重要な行事であり、「島で生きる島民の誇りと決意を表すもの」(山戸 2014, 20)であった。こうした行事を原発建設計画は破壊した。すなわち、原発建設計画に伴う祭りの中止である。例えば、山戸氏は「地域が全力を合わせなければ成し遂げられない祭りですが、島は原発推進、反対に分かれた」(山戸 2014, 20)と述べ、祝島神舞奉賛会は「祭りにはかなりの経費がかかるのに、原発問題で島が1つにまとまらなくなった」(朝日新聞 1992)と語っている。このように、祝島島民が1つの「島民」としてまとまる伝統行事を原発は破壊したのである。

こうした伝統行事の破壊はまた、共同活動の破壊という意味のみにとどまらなかった。例えば、山戸氏は神舞を「島の生活の大きな柱である」¹⁰⁾と位置付ける。また、氏本氏は

¹⁰⁾「上関原発建設予定地島民からー建設工事の不安なく迎える祝島神舞神事」。2012。『よつばつうしん』(2014年4月25日取得。 http://www.yotuba.gr.jp/~yotsuba/y_tsushin/2012/1208/017-8.pdf)。

祝島では「農地と漁船の両方を所有し、半農半漁の生活をしている島民」¹¹⁾が多くおり、こうした島民が「海と山～地域の自然に畏敬と感謝の気持ちで関わってきたからこそ島民社会が持続力を失わなかったことは、『神舞』という神事が千年以上の長期にわたって島内に伝承されているという事実」があると述べる¹²⁾。これらの発言から、祝島の人々が日常生活で「自然」を重視していることが捉えられる。すなわち、神舞を通して祝島の人々を観察してみれば、そこには祝島の人々が抱く「自然」に対する敬意があると解釈できる。このような意識は運動においても観察された。例えば、84年と88年の抗議活動にて島民の「一番大事な自然を失い、お金をもらう原発はおかしい」という意思表示から神舞の中止と自然の喪失を連鎖させ抗議している(毎日新聞 2012)。さらに、神舞の準備作業からも祝島島民と「自然」の関係を解釈できる。氏本氏によれば、神舞の準備作業では「舞小屋に使う資材は、島の山林から切り出してきた古木の支柱、それを補強するのは真竹、それらを固定するのは大小の麻縄など」¹³⁾を用いるという。こうした神舞の在り方が、祝島島民の「現世代を越えて環境に負荷を押し付けることは全くない。現世代の責任の範囲で執り行うという姿勢」¹⁴⁾を示している。つまり、祝島の人々にとって原発建設計画による神舞中止が意味するところは、共同活動の破壊のみにとどまらず、彼らが日々の生活にて重要視してきた「自然」の破壊という「意味」にも連鎖したことが考えられる。そして、こうした「破壊から自然を防衛する」という「意味」が運動に付与されていたことも考えられるだろう。

こうした原発による「自然の破壊」に対する島民の認識は、二点目に挙げた漁業等の第一次産業への被害からも考えられる。山戸貞夫氏によれば、原発建設計画は「地域の主力産業への危機感をもたらした」(山戸貞 2013, 8)とされる。換言すれば、島民らの日常生活を構成する生業への危機感といえるだろう。例えば、漁業者、とりわけ、遊覧船業の人々には、客が「広島方面が中心であったため、原発という核施設への強い嫌悪感が、直接漁師に伝えられ、自らの生業と原発の関係を本気で考えるきっかけ」(山戸貞 2013, 8)があった。他方、農業従事者もまた、「風評被害を強く懸念し、島での生活基盤」(山戸貞 2013, 9)の破壊に強い危機感を抱いていたとされる。こうした第一次産業従事者らの危機感が、原発に対して「自然を破壊するもの」という「意味」を付与したことが考えられる。この結果として例えば、愛郷一心会は当時の町長に対して、「祝島とその住民が今日まで平和にそして豊かに生きてこられたことは、この美しい大自然があったから」(山秋 2012, 21)という文言とともに抗議している。

¹¹⁾ 「氏本長一さんの意見陳述書(第3回公判)」。2010. 『上関原発 自然の権利訴訟』(2014年10月1日取得. http://sunameri09.blogspot.jp/2010/03/3_04.html).

¹²⁾ 同上。

¹³⁾ 「舞小屋建ての現場で思ったこと」。2010. 『氏本農園・祝島便り』(2014年10月1日取得. http://blogs.yahoo.co.jp/farm_ujimoto/65427189.html).

¹⁴⁾ 同上。

以上、住民関係や漁業への被害と(2)地元住民の意向を考慮しない国や中国電力への不満にもとづく「意味」として、島民の日常生活の破壊、すなわち、「共同活動の破壊」、そして「自然の破壊」があった。こうした島民の「日常」を破壊するものという「意味」が原発に付与されたこと、あるいは運動に「破壊から守る」という「意味」が付与されたことにより、島民に反対運動への参加動機が生成されたと考えられる。

4.2 放射能の「記憶」から見るローカルな「意味」

次に、(3)過去の事故から見る汚染という問題認識から原発と運動に付与された「意味」を考察していく。祝島では、原発に対して「恐怖」の「記憶」を有した人々が多く存在した。例えば、「上関原発を建てさせない祝島島民の会」のY氏は反対を続ける理由として以下のように語っている。

「出稼ぎに出て原発内での被曝労働を経験した人が多くおり、また広島原爆の被曝者・家族が島にかなりいることから原発＝放射能への嫌悪感を持った人が多かったことが挙げられる」(だめ!上関原発 2012, 9)。

このように原発と原爆、そして放射能汚染の問題を並列化した人々が多く存在していた。こうした「記憶」は、例えば原発労働を経験した人には「原発の怖さはよう知っとる。(目の前の)田ノ浦に原発ができれば、もう島では暮らせんようになる」(姜 2011, 324)と語られてきた。あるいは、戦争を経験した人には「広島の前原爆で悲惨な姿を見ているので原発は嫌いだ」¹⁵⁾と語られている。このように祝島では原爆に関する「記憶」が原発と結び付けられてきた。すなわち、戦争体験者や被曝労働経験者らの放射能にまつわる「記憶」が源泉となり、「恐怖をもたらすモノ」としての「意味」が構築され原発に付与されていた。その結果として、人々が「不安」や「恐怖」の感情を生み出したことが運動への参加を方向づけたと考えられる。

こうした個々人の「記憶」は祝島や運動内でいかにして醸成・定着、あるいは共有されていったのか。まずは、原発作業に従事した人々が「原発建設計画浮上をきっかけに、自らの原発での作業体験を話し、計画に反対するように島の皆に働きかけた」(山戸貞 2013, 8)ことがあげられる。例えば、建設計画の前年に、敦賀原発に出稼ぎに行っていた橋本久夫氏は祝島漁協の理事の一人であった父、橋本友次氏から原発について聞かれ『『そういうものを、つくらしたら、もう…。絶対反対せにゃあ』』(山秋 2012, 17)と伝えている。こうした語りをもとに橋本友次氏は原発推進派であった漁協組合長のリコール活動を行い、その結果、祝島漁協は原発への反対を表明した。次に、漁業者以外にもこうした「記憶」は

¹⁵⁾「元気スペシャル 山口県上関町原発反対27年」, 2010. 『全日本民医連』(2014年4月25日取得. <http://www.min-iren.gr.jp/syuppan/genki/220/genki220-01.html>).

共有されていた。祝島島民である蛭子公雄氏も橋本友次氏から話を聞いた後、「毎晩のように、島人たちと原発問題を話しあっていた」(山秋 2012,20)という。最後に、祝島の女性らの存在が挙げられる。例えば、伊方原発への視察旅行に参加した漁協婦人部は、原発の前の海を見ると『海の色が違う』(山戸貞 2013,17)などと原発に対する違和感を語り合い、原発反対の意向を帰島する過程で決めたと語る。その1年後、この婦人部のデモ活動は愛嬌一心会のデモ活動と同時に行われるようになった。その後、祝島でのデモ活動は2014年9月に1200回目の活動が行われている。こうした継続的なデモ活動によって、例えば新たに島民となったUターンやIターンの若者などに原発の「記憶」が付与されたこと、あるいは、継続的に参加している島民に醸成・定着していったことが考えられるだろう。

ここまで議論してきたように、祝島島民は原発や原爆、そして戦争体験に由来する「記憶」を有していた。こうしたそれぞれの「記憶」が源泉となり、原発に対して「恐怖をもたらすモノ」という意味が付与されたことが人々を運動へと動機づけたと考えられる。さらに、こうした原発をめぐる「記憶」は島民らの相互作用、すなわち、原発の危険性を語り合う過程を経て、共有されていったと考えられる。

しかしながら、こうした近年の反原発運動に見られる「ノーモア・ヒロシマ」や「ノーモア・フクシマ」などの原発や原爆に連鎖した「意味」は、近年の上関原発反対運動では観察されにくい。その要因は後述のように、運動参加者が反原発運動を一つのステップとして、祝島の自立(自律)という目的を獲得したことにあつたと考えられる。以下では、トランスナショナルな「意味」とともにその受容につながった運動の変化を考察していきたい。

4.3 「生態系の破壊」から見るトランスナショナルな意味

ここでは(4)生態系の破壊から上関原発反対運動のトランスナショナルな「意味」を考察する。上述のように反対運動では、80年代に「自然」を守るという目的をもった人々がいた。とはいえ、ここでの「自然」は島民の日常、すなわち、「自然」と共生してきたこと、あるいは、神舞という伝統行事をもとに醸成された「意味」であった。つまり、「生態系の破壊」という「意味」は島外の人々、または従来反対活動を展開してきた人々とは異なる人々により導入された「意味」と考えることが妥当であろう。ここでは、この「生態系の破壊」がいかんにして獲得されたのかについて、「上関の自然を守る会」の経験から考えたい。

「上関の自然を守る会」は「上関原発を建てさせない祝島島民の会」とは異なる在り方で、反対運動に参加している。すなわち、「守る会としての14年の蓄積が運動の基本」(2013.8.19. T氏インタビュー)と代表のT氏は語る。この蓄積とは、T氏によれば生態系の調査や解明を指す。こうした運動の結果として、例えば「カンムリウミスズメの発見により、一年埋めたてが延びている」(2013.8.19. T氏インタビュー)とT氏は語る。つまり、「上

関原発を建てさせない祝島島民の会」は直接的なデモ行動などを反対運動の基軸に置き、「上関の自然を守る会」は原発立地地域周辺地域での新たな発見から中国電力や県の行為を妨げることに主眼を置いている。

こうした行動のきっかけとしてT氏は、まず、生態学の専門家による「ここ(原発立地地域周辺)は世界遺産にすべき」(2013.8.19. T氏インタビュー)という示唆があったと語る。こうした示唆は日本生態学会や日本鳥学会などの学会、あるいは、国際シンポジウムなどを通じて確かなものとしていったことが考えられる。さらに、こうした活動の「経験」からT氏は、原発立地予定地域を次世代へ引き継がなければならないと認識したとも語る。つまり、専門家による提言、ならびに様々な知識を獲得するための活動を通じて得られた「経験」を源泉として、「上関の自然を守る会」が「生態系の破壊」という「意味」を原発に付与したといえる。そして、こうした「意味」が彼らの反原発運動参加への動機となったことが考えられるだろう。

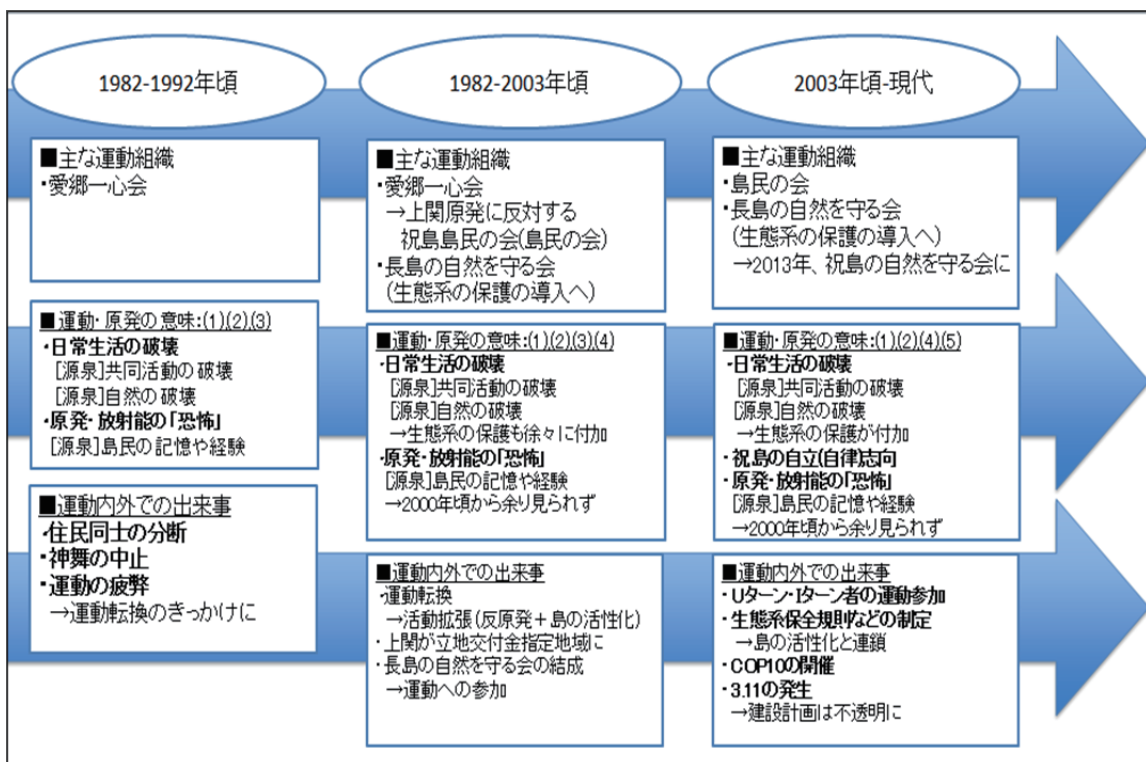


図1 筆者作成

4.4 トランスナショナルな「意味」とローカルな「意味」の関係

このような、「生態系の破壊」という「意味」はローカルな「意味」とどのような関係にあるのか。本稿ではこれを、(5)町の新しい在り方の模索から考えたい。この目的について例えば、山戸孝氏は以下のように述べている。

「祝島の反対運動というのは、原発を建てさせないというのがもちろん目標ではあるんだけど、ある意味、一つのステップだと思っているんです。原発の建設を止めるというステップがあってさらに次に進むための。——島が自立するという目標があって、そこに対して原発はほんとうに大きな障害ですから、何とか乗り越えようとしていると、私はとらえています。」(山戸 2010, 40)

このように祝島の反対運動はいわゆる「反原発」運動から、「反原発という目的を含めた運動」へと変化した。こうした変化の背景の一つに、2008年の「祝島自治会生態系保全規則」がある。この規則では(1)島外からの無秩序な動植物の持込みの禁止、及び事前協議、(2)有識者などを含む生態系保全委員会での検討、そして(3)持込み後の自治会による立入調査などがある。この取り組みの提案者は「島民にとっては瀬戸内海の豊かな生態系を守ることと、原発建設反対運動は同義なのです」¹⁶⁾と述べている。この規則が出来た背景に、祝島未来航海プロジェクト「地球船祝島丸」という計画があった。このプロジェクトについて、立案者は「物心両面で原発依存症の町政と一線を画し、島民自ら知恵を出し合っ『一流の離島』を作ろうとの意図」¹⁷⁾があると語りつつ、目的として「次世代に胸を張って引き継げる『一流の離島・祝島』」を掲げている。さらにこのプロジェクトは祝島自治会、「上関原発を建てさせない祝島島民の会」そして「上関の自然を守る会」の協力があつた¹⁸⁾。すなわち、祝島島民と「上関の自然を守る会」が相互作用したことにより、「自然」という「意味」に「生態系の保護」を見出すための学習機会が生じたといえる。この結果として、上関原発反対運動は「日常」と連鎖した自然の「意味」のみならず、「生態系の保護」という「意味」も獲得したと考えられる。

また、「生態系の保護」は、COP10による影響があつたことも考えられる。例えば、COP10にて上関問題を取り上げた虎十の会のS氏は、祝島の人々がCOP10に期待していなかったと語りつつ、NGO声明にて上関問題が取り上げられたことで、反対運動は活気づいたことをCOP10の成果として挙げていた(2013.6.24. S氏インタビュー)。さらに、COP10を通じて、日本の大手マスメディアが反対運動の報道を行ったことで、祝島島民が祝島を世界的に重要なものであり、且つ自分たちの行いは間違っていないと理解したのではないかと述べている(2013.6.24. S氏インタビュー)。つまり、祝島島民は「上関の自然を守る会」との相互作用と並行して、COP10を介して運動活動に正当性を見出していたと解釈できる。

¹⁶⁾ 「祝島自治会生態系保全規則」. 2008. 『氏本農園・祝島だより』(2014年4月10日取得, http://blogs.yahoo.co.jp/farm_ujimoto/33875232.html).

¹⁷⁾ 「祝島未来航海プロジェクト」. 2007. 『氏本農園・祝島だより』(2014年4月10日取得, http://blogs.yahoo.co.jp/farm_ujimoto/archive/2007/11/12).

¹⁸⁾ 「上関原発予定地長島の生態系の解明と詳細調査によるダメージの検証及び地域再生に向けた実験的試行」. 2009. 『高木基金助成報告集市民の科学をめざして』(2014年4月11日取得, <http://www.takagifund.org/grantee/report/rep2009/06-19.pdf>).

つまり、祝島島民は「上関の自然を守る会」との相互作用によって、「自然」という「意味」に「生態系の保護」を連鎖させたことが考えられる。また、COP10での報道によって、祝島島民が運動活動に「正当性がある」という認識を得たことが反対運動を促進、または継続させていく上で一つの要因となったとも考えられる。

以上の議論から、トランスナショナルな「意味」とローカルな「意味」の関係を決定づける条件とは、ローカルの人々がその「意味」を受け入れるか否か、換言すれば、ローカル運動の在り方が重要であると考えられる。上関原発反対運動に鑑みれば、反原発運動としての側面が強かった「愛郷一新会」当時の運動が継続していた場合、「自然」の「意味」は、「日常」との連鎖にとどまっていたかもしれない。しかし当該組織は神舞の復興、あるいは2003年の町おこしへの提言のように運動の方向性を町の発展、すなわち、「島の自立(自律)」へとシフトしていた。こうした運動の変化が「上関の自然を守る会」との相互作用を可能とし、結果として上関原発反対運動は「自然」という言葉に「日常」のみならず、「生態系の保護」という「意味」を連鎖させたと考えることができる。

こうした変化はまた、「3.11」以降に生じた複数国にて展開される反原発運動とは異なる運動の在り方につながる。例えば「ノーモア・フクシマ」や「ノーモア・ヒロシマ」という「意味」は近年の上関原発反対運動ではあまり見られない。こうした「意味」について、島民の会のY氏は、「3.11」以降活発化した反原発運動を「原発を思想的に問題とする運動であり攻撃的な姿勢の運動」、あるいは「自己顕示欲が強いだけにしか見えない」と語りつつ、そこで挙げられている主張を「政治的・イデオロギー的である」と捉えていた(2013.8.19. Y氏インタビュー)。対して、祝島の反対運動について、「(運動組織は)生活を守るためであって思想集団ではない」と語りつつ、「政治的な対立、イデオロギーはなるべく排除してきた」と捉えている(2013.8.19. Y氏インタビュー)。このことから、祝島の反対運動では「ノーモア・フクシマ」や「ヒロシマ」などの「意味」は政治的な対立を導き出す、あるいは攻撃的な「意味」としてみなされていると推測される。

一方、祝島での反原発運動に参加してきた人々は島での「日常」を守ること、そして「日常」を構成する島民の「共同作業」や「自然」を守ることが動機としてあると考えられる。すなわち、運動を「生活に根差した共同作業」(山戸貞 2014, 157)の一環としてみなす島民の存在が、運動に「ノーモア・フクシマ」や「ノーモア・ヒロシマ」などの「意味」が導入されなかった要因として考えられる。このように、ローカルな人々や運動組織がトランスナショナルな「意味」を受容する条件が整っているか否か、この点がトランスナショナルとローカルな「意味」の関係を考察する上で一つの重要な要素となると考えられる。

5. おわりに

本稿では、ローカルな「意味」とトランスナショナルな「意味」がいかんにして獲得されたのか、そして、これらの「意味」の関係はいかなるものかという問いを考察することを

目的として論じてきた。これらの問いに対して本稿では、トランスナショナル社会運動の一つとして反原発運動を取り上げ、社会運動論領域の3つのアプローチ、すなわち文化論アプローチ、意味論アプローチ、そして集合的アイデンティティ論アプローチの視点をもとに検討してきた。この結果は以下の3点である。

第1に、ローカルな「意味」として日常を源泉とした「破壊をもたらすもの」と、記憶を源泉とした「恐怖をもたらすもの」という「意味」が見られた。前者は、原発建設計画により破壊された島民の日常生活を構成する「共同活動」や「自然」が源泉にあった。こうした祝島の「日常」を破壊するものという「意味」が原発に付与されたこと、あるいは運動に「破壊から守る」という「意味」が付与されたことが、島民を運動へと動機づけた要因の一つとして考えられる。後者は、原爆被害や原発労働などの「記憶」を有した人々の「語り」や「経験」をもとに、「恐怖」の「意味」を原発に付与していた。こうした「意味」はまた、祝島島民同士の相互作用を経て、島民に醸成・定着し共有化されていた。

第2に、トランスナショナルな「意味」として「生態系の保護」という「意味」があった。これらの「意味」は「上関の自然を守る会」が専門家による提言、ならびに学会活動などの「経験」を源泉とし、原発に付与していたことがわかった。自然を守る会の人々は、これらの「意味」をもとに運動参加へと動機づけられたと考えることができる。

第3に、トランスナショナルな「意味」とローカルな「意味」の関係として、ローカル運動の在り方がトランスナショナルな「意味」の導入を方向づけていたことを明らかにした。すなわち、トランスナショナルな「意味」とローカルな「意味」の関係を捉えるには、ローカル運動の目的や問題意識を観察する必要を示唆した。

以上の議論から、本稿ではトランスナショナル社会運動を検討する上で、その運動が展開されている地域や国家の文脈、並びに運動参加者の経験や記憶などの心理的要因を検討対象とすることが重要であるという知見を得ることができた。これらの知見に鑑みれば、トランスナショナル社会運動を総合的に解明するには、先行研究にみられたグローバルな構造要因を検討しつつ、対象とする運動に内在する多様な「意味」の構築プロセス、及びトランスナショナルに活動している運動組織とローカルな人々の相互作用を検討することが重要であると考えられる。すなわち、トランスナショナル社会運動をとりまくマクロな要素とミクロな要素を総合的に観察し、丁寧に記述していく分析デザインを組み上げていく必要があると言えるだろう。

【参考文献】

- 朝日新聞山口支局. 2001. 『国策の行方—上関原発計画の20年』南方新社.
- 石塚さとし. 2011. 「中国電力上関原発立地計画に抗する人びと」『マスコミ市民』513 : 54-65.
- 伊藤昌亮. 2011. 『フラッシュモブズ 儀礼と運動の交わる場所』NTT出版社.

- 上関原発を建てさせない祝島の会他(編). 2012. 『だめ!上関原発』.
- 川北稔. 2004. 「社会運動と集合的アイデンティティ」曾根中清司他(編)『社会運動という公共空間：理論と方法のフロンティア』成文堂：53-82.
- 姜誠. 2011. 「マイノリティと反原発(2)山口県上関町・祝島で〈何かが変わる〉?」『すばる』33(11)：322-334.
- 西城戸誠. 2008. 『抗いの条件』人文書院.
- 野宮大志郎. 2002. 「社会運動の文化的研究とその課題—その問題とこれから—」野宮大志郎(編)『社会運動と文化』ミネルバ書房：193-213.
- 松田素二. 1997. 「都市のアナーキーと抵抗の文化」青木保他(編)『岩波講座 文化人類学 第六巻 紛争と運動』岩波書店: 95-134.
- 山秋真. 2012. 『原発をつくらせない人びと——祝島から未来へ』岩波書店.
- 山戸貞夫. 2013. 『祝島のたたかい——上関原発反対運動史』岩波書店.
- 山戸孝. 2010. 「インタビュー 原発はいらない—ほんとうの自立をめざす祝島の人々」『都市問題』101(10)：31-43.
- . 2014. 「脱原発の島づくり構想」和光大学総合文化研究所『東西南北 2014 和光大学総合文化研究所年報』17-23.
- Adamson, FB. 2005. Globalization, Transnational Political Mobilization, and Networks of Violence. *Cambridge Review of International Affairs* 18 (1): 35-53.
- Bayard de Volo, L. 2000. Global and Local Framing of Maternal Identity: Obligation and the Mothers of Matagalpa, Nicaragua. In: Guidry, JA., Kennedy, MD. and Zald MN eds. *Globalization and Social Movements: Culture, Power, and the Transnational Public Sphere*. Ann Arbor: University of Michigan Press, 127-146.
- Edwards, G. 2014. *Social Movement and Protest*. New York: Cambridge University Press.
- Fantasia, R. 1988. *Cultures of Solidarity: Consciousness, Action, and Contemporary Workers*. Berkeley: University of California Press.
- Giugni, M., Bandler, M. and Eggert, N. 2006. The Global Justice Movement How Far Does the Classic Social Movement Agenda Go in Explaining Transnational Contention?. *Civil Society and Social Movements Programme Paper No. 24, United Nations Research Institute for Social Development*.
- Johnston, H. 2014. *What is a Social Movement?*. Cambridge: Polity press.
- Johnston, H. and Klandermans, B. 1995. *Social Movements and Culture*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Langman, L. 2005. “From Virtual Public Spheres to Global Justice: A Critical Theory of Internetworked Social Movements.” *Sociological Theory* 23(1): 42-74.

- McDonald, K. 2006. Zapatista Dreaming: Memory and the Mask. In: *Global Movements: Action and Culture*. Oxford: Blackwell Publishing, 111-139.
- Melucci, A. 1989. *Nomads of the Present: Social Movements and Individual Needs in Contemporary Society*. Philadelphia: Temple University Press. (=1997, 山之内靖・貴堂嘉之・宮崎かすみ訳『現在に生きる遊牧民(ノマド)—新しい公共空間の創出に向けて』岩波書店.)
- . 1995. The process of collective identity. In: Johnston, H. and Klandermans, B eds. *Social Movements and Culture*. Minneapolis: University of Minnesota Press, 41-63.
- . 1996. *Challenging Codes: Collective Action in the Information Age*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Nomiya, D. 2009. Under a global mask: family narratives and local memory in a global social movement in japan. *Societies without Borders* 4: 117-140.
- . 2014. Social Movement in Japan: Split Mentalities and Memory. In: Farro A, and Lustiger-Thaler H eds. *Reimagining Social Movement From Collectives to Individuals*. Aldershot: Ashgate, 81-95.
- Nomiya, D. and Sugino, I. 2013. Social Movements as the Network of Meanings: Comparing Mental Maps of 1954 and 2012 Antinuclear Movements in Japan. In: *Dynamics of Convergence and Divergence: Changing Societies and Values in East Asia* (Proceedings of 2013 East Asian Sociologists' Network Special Symposium, Seoul National University, Korea, 25-26th October, 2013) 1-29.
- Polletta, F. and Jasper, JM. 2001. "Collective Identity and Social Movements." *Annual Review of Sociology* 27:283-305.
- Rothman, D. and Oliver, P. 2002. "From Local to Global: The Anti-Dam Movement in Southern Brazil, 1979-1992." In: Smith, J. and Johnston, H eds. *Globalization and Resistance: Transnational Dimensions of Social Movements*. Lanham: Rowman and Littlefield Publishers, 115-132.
- Snow, DA., Rochford, EB Jr., Worden, SK. and Benford, RD. 1986. Frame Alignment Processes, Micromobilization, and Movement Participation. *American Sociological Review* 51 Issue 4: 464-481.
- Snow, DA. and Benford, RD. 1988. Ideology, Frame Resonance, and Participant Mobilization. *International Social Movement Research* 1:197-217.
- Snow, DA. and Benford, RD. 1992. Master Frames and Cycles of Protest. In: Morris, AD. and Mueller, C eds. *Frontiers in Social Movement Theory*. New York: Yale University Press, 133-155.
- Spybey, T. 1996. *Globalization and World Society*. Cambridge: Polity Press.

- Smith, J. 2004. Transnational Process and Movements. In: Snow, DA., Soule, SA. and Kriesi, H eds. *The Blackwell Companion to Social Movements*. Oxford: Blackwell Publishing, 311-335.
- Tarrow, S. 2005. *The New Transnational Activism*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tatsuno, Y. 2014. A Discussion of Nuclear Power Issues in Regions with Nuclear Facilities - The Kaminoseki Nuclear Power Plant Opposition Movement in Kaminoseki, Yamaguchi Prefecture as a Case Study-. In: Grant-in-Aid for Scientific Research (A) eds. *Sociology in the Post-Disaster Society: "Reconstruction from the Great East Japan Earthquake - The Road to Overcome the Earthquake, Tsunami, and Nuclear Disaster-*, 159-177.
- Taylor, V. 1989. Social movement continuity: the women's movement in abeyance. *American Sociological Review* 54 (5): 761-775.
- Taylor, V. and Whittier, NE. 1992. Collective identity in social movement communities: Lesbian feminist mobilization. In: Morris, A. and Mueller C eds. *Frontiers in Social Movement*. New York: Yale University Press, 104-129.

自己紹介

Yosuke Tatsuno is a PhD student in the Doctoral Program in International Relations, Graduate School of Global Studies, Sophia University. He received his MA in International Relations Studies from Sophia University (2013). His research interests include social movement theory, sociological theory, and comparative methodology.

謝辞

本論文の作成にあたり、査読者の先生には終始適切な助言を賜り、細部にわたるご指導をいただきました。ここに感謝いたします。

また、本研究の趣旨を理解し快く協力して頂きました調査対象地区の各団体、および調査対象者の皆様に心から感謝します。本当にありがとうございました。